

信毎俳壇

神野 紗希 選

山間の街返らず合つづき

わが虚へなだるる崖の青葉かな

茅花みな伏してガーゼの語源の地

緑なる昭明弾や海霧の沖

世界難民の日島国も船で

木曾馬の親子に散りし樺の花

ギザギザのライオンの舌やませ来る

早々と氷旗立つなんでも屋

ゆうただかくもがかぜひいちゃったんだ

雄踏の改札口や夏の雨

佳作

決勝は職員チーム朴若葉

開け放つ教会の窓青葉風

(佐久市) 佐藤 勝子

(長野市) 南郷 修二

(松本市) 竹内 京子

(小諸市) 加藤 陽介

(松本市) 久我 綺乃

(辰野町) 栗津原吉弘

(富田村) 金本 牧子

(阿南町) 高嶋 良光

(中野市) 風間 一乃

(長野市) 宮沢 信博

(上松町) 前野 春樹

(長野市) 宮島佐子

選評

一句目、^{タニウツギ}を吸うて山はいよいよ夏を深める。タニウツギの桃色は山の命の発露。二句目、崖の青葉の力強い密度が私の空虚と対比をなす。自然と人間は切り分けられるものではなく、見つめていれ

ば自然もまた私の中になだれこんでくるのだ。三句目、けがの治療に使うガーゼ、語源はガーゼの地だといわれる。茅花は世界に広く分布する植物。風の伏せゆく銀色の穂に耐える人々の悲しみが光る。

坊城 俊樹 選

いつになく饒舌な夫薔薇一輪

湖底なるナウマンゾウの夏の夢

山の風吐かせてたたむ鯉轍

万緑の底に山湖の鎮もれり

飲み干して喰るビールの旨さかな

子燕の巣立ち見届け逝きにけり

魚礁から銀鱗躍る初夏の海

薫風や人影の無き遊園地

バスを待つ一花の如き日傘

葉桜となりて一息つく古木

佳作

山開き竜を鎮むる太鼓かな

襟までも白粉たたいて夏舞台

(須坂市) 丸山 英子

(長野市) 小林 明男

(安曇野市) 丸山 進也

(大町市) 原田 勝

(木島平村) 日台 敏夫

(松本市) 小林 幸平

(須坂市) 牧野 勇水

(飯田市) 大石 昭重

(箕輪町) 向山 政俊

(安曇野市) 平 至行

(長野市) 白鳥 寛山

(佐久穂町) 石田 弘子

選評

一句目、このご夫婦の関係性が素敵。ふだんはムスッとしているご主人がこの薔薇一輪を見るととたんに冗舌になった。おやまあこんな側面もあったのか。二句目、野尻湖の湖底からはさまざまな

化石が見つかる。氷河期のナウマン象のもの。彼は今でも当時の夏の夢を見て眠っている。三句目、ふんだんに山の風をのみ込んだ鯉轍を下ろして畳む時が来た。鯉の口から風を吐かせるように。

今井 聖 選

骨揚げの夜の風呂場を守宮かな

牡丹のがばりと散つてしまひけり

板の間に真鯉跳ねたる宵祭

飛魚の翅の筋肉ひかりけり

網戸して湯上りの身の置きどころ

龍目覚め天に踊るや祭笛

左利きになりたき夏や右手麻痺

小満や投げ銭ははめ辻薬士

雪隠も消へ鋭さも失せし額

若葉風姿を頼りの腹注射

佳作

父と祖父下戸でありし柏餅

舞台裏の着付けかしまし緑雨中

(横浜市) 伊予 素数

(須坂市) 丸山 英子

(箕輪町) 向山 政俊

(佐久市) 佐藤 勝子

(安曇野市) 丸山 進也

(長野市) 宮沢 信博

(須坂市) 牧野 勇水

(安曇野市) 平 至行

(飯田市) 大石 昭重

(長野市) 宮沢 義親

(飯綱町) 坂井 寿男

(佐久穂町) 石田 弘子

選評

一句目、弔事の最中であろうと人は食べねば生きていけないし、風呂にも入れねばならぬ。人の死と守宮の生がそこで交差する。二句目、牡丹の開花の見事さ

ばり」は言い得て妙。三句目、祭の前夜、明日の膳にのる鯉が板の間に跳ねる。鯉と板の間の対照が風土性を実感させる。四句目、洋上かなりの距離を飛ぶ飛魚。翅にも筋肉を感じる。